

商店探訪

①

辰巳屋商店 (鳥取県境港市)

大塚 茂

「妖怪のまち」にひっそりと

妖怪のブロンズ像が立ち並ぶ境港市の水木しげるロード。この妖怪通りの中程に古くて目立たない一軒の菓子店がある。店の名は辰巳屋商店。この店の非凡さに気づく人はまれで、ほとんどの人は店内に足を踏み入れることなく通り過ぎていく。

私たちはその日(八月十日)、取材のため二時間近く店の中に座っていた。ときどき観光客らしき人々が店の前で立ち止まる。店内にちらっと視線を向ける人もいるが、たいていの人はまるで店の存在自体にさえ気づかないようだ。どのみち、店内に入ってきた客は皆無だった。どうも店先にスタン

プラリーのスタンプが置いてあり、子どもたちがスタンプを押ししている間、大人たちは立ち止まってあたりを何気なく眺めているだけのようだ。

何か面白いものはないかと、ちよっとした好奇心を持って視線を動かせば、この店が並の店でないことはすぐにわかる仕掛けになっているのだが……。まずは軒下にある古い看板。店名の「辰巳屋商店」、それに時代を感じさせる字体で



「森永ミルクチョコレート」「森永ドロップ」と書かれている。ただ、これらは首をぐいと曲げて上を向かないと目に入らない。普通、そんな不自然な動作はしないので、普通はまずこの看板が視野に入ることはない。

修理中の駄菓子ケース

次に、この店の数々の「收藏品」の中でも特に価値があると思われる駄菓

■懐かしの駄菓子ケース (修理後に撮影)





子のショーケース。店の中央、出入り口付近をどーんと占領している。浅いブリキの箱が縦に二つくつついた形のケースで、上にはガラスの蓋が載っている。蓋は二枚が蝶番でつながって



いて、一枚を開けると、もう一枚の方が支えの役割を果たす。こんなケースが全部で十二個（つまり二十四の収納箱）、木製の台の上に並べられている。台は平らではない。前方から全体がよく見えるよう、後方がやや高くなるように傾斜がつけられている。いつ購入したのかははっきりしないが、たぶん戦後の早い時期だろうという話だった。昔は一斗缶などで入荷した菓子をこのケースに移し、量り売りしたものだ。今はもちろんバラの駄菓子子の量り売りなどない。代わりに袋詰めした菓子が入っている。「ゼリービズ」や「あんきり」（当地方では「あんぼろ」が普通の呼び名）、「金平糖」など、懐かしの駄菓子が並ぶ。私たちが取材に訪れたとき、ガラス

蓋の半分（六セット・十二枚）が修理に出されていて、そこにはなかった。「子どもが手をつけてガラスがだんだん割れてきたので」「ガラスが入っていないと枠がグラグラするし、埃もするので」という説明だった。「こんな古いケースをわざわざ金をかけて修理しなくても……」「今はどの店でも包装されたお菓子はそのまま棚に置いているし、ガラス蓋がなくてもどうってことないはずなのに……」

と多くの人は思うだろう。だが、修理しなくてはという気持ちは理屈ではないようだ。

「收藏品」の数々

ほかにも大事な收藏品はたくさんある。例えば、駄菓子が入っていた一斗缶。中身が見えるよう、前面に窓を取り付けたものもある。「白奴糖」「油菓子」と書かれた何やら正体不明の缶もある。製造元は「正気屋製菓株式会社」という会社のようにだ。「お座敷あられ」という時代を感じさせる商品名の缶もあった。

量り売り用の紙袋もどこからか出てきて見せてくれた。「どうしてこんなものが大事にとつてあるんだ!？」と

思わず叫びたくなるような珍しい代物だ。「もちろん……」という感じで、年代物の秤もあつた。棚の片隅に隠れていたのを、わざわざ周りのものを片付けて見えるようにしてくれた。

このほか、かつて生菓子やデコレーションケーキ用に使っていた大きな木のショーケース、桜餅やシュークリームの箱などを入れていた小さな木箱（上面がガラス）など、古いケースが大事に保存されている。しかも、これらがいずれも現役なのである（ただし、今では中に入っているのは包装された菓子だ）。

栢木あささんのこと

辰巳屋の主は栢木あささんという



九十歳を超えたおばあさんだ。営業許可証もあささんの名で発行されている。あささんは長年、ご主人の繁治さんとともに菓子の製造・販売に携わってきた。二十五年ほど前に繁治さんが亡くなってからは、一人で店を切り盛りしてきた。そのあささんも今は店にいない。近年、具合が思わしくなく、とうとう施設に入所したとのことだ。昨年の秋に取材に訪れたときはまだ店に座っていて、私たちと言葉を交わしたりもしたのだが。

あささんの具合が悪くなってからは、あささんの弟・栢木茂貞さんの妻・君江さんが店番をしている。住まいは店と別で、通いで店番をしている。茂貞さんは長男だが、親の代からの家業を継いだのは長女のあささんで、自ら



は小学校の教員をしてきた。定年後も十年ばかり、あれこれと頼まれた仕事をこなしてきたが、最近になってやっとそれもなくなり、君江さんとともに店番を行う。

煎餅から出発

あささんの両親は大阪に住み、製紙会社に勤めていたが、大正年間に境港に帰ってきた。最初に手掛けたのは煎餅の製造・販売である。その後、饅頭や「あんぼろ」も加え、町のお菓子屋さんとしての道を歩んでいく。

だが、道は平坦ではなかった。やがて日本は戦争に突入し、繁治さんは出征、原材料不足にも悩まされた。さらに、一九四五年四月二十三日、火事で店を失うことになる。この日、火薬を積んでいた船で爆発が起こり、一帯は大火事となり、辰巳屋も全焼した。

その後、戦争から帰ってきた繁治さんが十五坪ほどの店を建てて営業を再開する。煎餅は大きな竈かまが必要なので作るのをやめ、まずは饅頭から製造を再開した。建物の方はその後、継ぎ足し継ぎ足しして現在の形になる。

菓子製造が繁盛した頃

戦後四、五年経ったころから、クッキーやらカステラの製造を始めた。さらに、チョコレート饅頭、春雨（落雁



の一種)、デコレーションケーキ、と製品の種類を増やしていく。製品の開発は繁治さんが担った。講習を受けたりして研究を重ねた。

クリスマスも季節ともなるとクリスマスケーキの注文を取り、当日は製造やら配達で大忙しだった。また、「サンタクロースの靴」を仕入れてきて、中にいろいろな菓子を詰めて売った。

このように、和洋さまざまな菓子を手掛けてきたが、店の名物は桜餅だったようだ。ただ、日持ちがせず季節ものである桜餅は全国菓子大博覧会の出品には向かなかつたようで、店内に掲げられた賞状の中に桜餅はなかった。全国菓子大博覧会の受賞歴は次のとおりである。

第十五回（昭和三十六年）

特等賞・春雨



第十六回（昭和四十年）

金賞・チョコレート饅頭

第十七回（昭和四十三年）

金賞・クッキー

第十八回（昭和四十八年）

金賞・カステラ

たばこ売場の窓から

繁治さんが亡くなってからは、それまでどおりの菓子製造は困難となった。しばらくの間は、最中やシュークリームなど、いくつかの菓子にしぼって作っていた。が、十五年ほど前にそれもやめた。現在は仕入れた菓子とたばこ、それに宝くじを売るだけだ。

たばこ売場の中は半畳ほどの畳が敷いてあり、そこに座椅子が置いてある。茂貞さんは取材中ずっとそこに座って



■ (写真上) 年代物の秤。(写真下) 宝くじ券の収集帳。

質問に答えてくれた。たばこ売場の小さな引き戸の中には、手がやつと出し入れできるほどのさらに小さな引き戸が付いている。暖房が十分でない時代、冬の寒いときにはこれが重宝な窓だったのだろう。

この窓からは宝くじも売られた。実は、水木ロードマップなどでは、辰巳屋は宝くじのよく当たる店として紹介されている。店頭のガラス戸には「大当りの数々」なる貼り紙がある。何と、その中には「第383回全国自治宝くじ 一等 一億五千万円 当店から発売されました」とある。『宝くじ集録』という珍しいものも見せてもらった。これまでの宝くじ券の収集帳

で、雑誌に糊付けしたものだ。最初のページの最初に貼ってある券は「日本政府第壹回宝くじ」の券だった。最近になって、店のどこから出てきたそうだ。

私はもちろん、たばこ売場の中から通りを眺めたことなどない。この小さな窓からは外の世界がどんな風に見えるのだろうか。残念ながら、今回はそこに座ってみることはできなかった。今度おじやましたときは、ぜひお願いしたいものだ。

戦後六十年の歴史を刻んだ店舗と「收藏品」の数々。昭和二十〜三十年代がそのまま保存されたような空間。

これらの貴重な「生業・暮らしの文化資料」は、これからどうなっていくのだろうか。間違っても、これらの平凡な（昔はどこにでもあった、という意味）品々が博物館に収蔵されることはないだろうし、仮に博物館入りが果たせたとしても、その途端にそれまで

放っていた光彩を失ってしまうであろう。生業・暮らしの文化資料とはそんなものだ。現役だからこそ魅力的なのである。店の主がいつまでも元気で店を守り続けてくれることを祈るのみだ。
(おつか・しげる／食料経済学)



■たばこ売場の小さな引き戸。

街のおもしろ文化観察学入門

山野愛美
三原真由美

小さな文化？

非常に頭を悩ます課題がでた。この課題が出されたのは「地域文化研究」という授業で、各自が「地域文化とは何か」を考え、模索し、実際に街を歩いて「文化を感じさせるもの」を見つけてくるというものである。

しかも、評価が定着し、観光ガイドブックに載っているようなものは除くという条件付きで、もっと「小さ

な文化」を探さないとのこと。

この課題が出された時、ふと頭に浮かんだのは「松江って県庁所在地じゃない!! 発展しているから文化なんて、そうめつたに見つからないんじゃないかな」であった。しかし、友達の意見は「城下町だから文化なんていっぱいありそう」。どちらが正しいかは、街を探索するまで分からない。それよりも「いったい文化って何?」というのがもっとも難題だった。

あの石、なにに？

松江の街を実際に歩いてみる。大通りだけではなく、普段歩くことのない路地も探索した。すると、家の外側にフェンスのようなものが立てかけて

あったり、道路に面した家の角に人の顔の大きいくらいの石が置いてあったりと、不思議なものがいろいろと見つかる。課題をこなすためによく目を凝らしていたから、そのようなものに気がついたと思う。これらはおそらく、狭い路地を通行する車が家に接触しないようにしているためではないだろうか。初めて目にした光景だが、暮らしの中で生まれた知恵を実感した。

靴の修理できます！

次に商店街を歩いた。白潟天満宮のすぐそばの水野靴店におじゃましました。このお店は一九三七年の創業で、古くからこの街にある。靴を販売するだけではなく、修理もしてくれる。以前は作ってもいたそうで、店先にはその靴

が展示してあった。靴はとても手の込んだもので、一足作るのに一日を費やすそうだ。

その靴は近頃の靴に比べると重く、とても頑丈であった。昔の人は丈夫な靴を履き、壊れたら修理に出し、大事に靴を履いていたそうだ。しかし、今では靴も低価格になり、手ごろに買うことができる。靴を修理に出す人はめっきり減った。現在、靴を修理できる職人は松江に二、三人しかいないらしい。

水野靴店の店主は、「他にすることがないから靴屋をやめない」と言っておられたが、きつと靴には店主を魅了する何かがあるはずだ。遠方からも靴の修理の依頼がくるほどお客さんの信頼を得ている靴屋である。こういった





靴屋は少なくなってきているが、これからも残ってほしいと思う。

万年筆を修理する？

次に見つけたのは中屋万年筆店というお店だ。店の前の広場で鳩が仲良く憩うのんびりとした街角にある。名前からもわかるように万年筆を専門としているお店だ。現在は万年筆を使う人

も少なくなっており、専門店も全国でも少ない。その一軒が山陰にあるということに驚きを感じる。

店内のガラスケースには万年筆が整然と並べられていた。この中屋万年筆店は一九一八年に創業され、天神町には四十年前に来たそうだ。

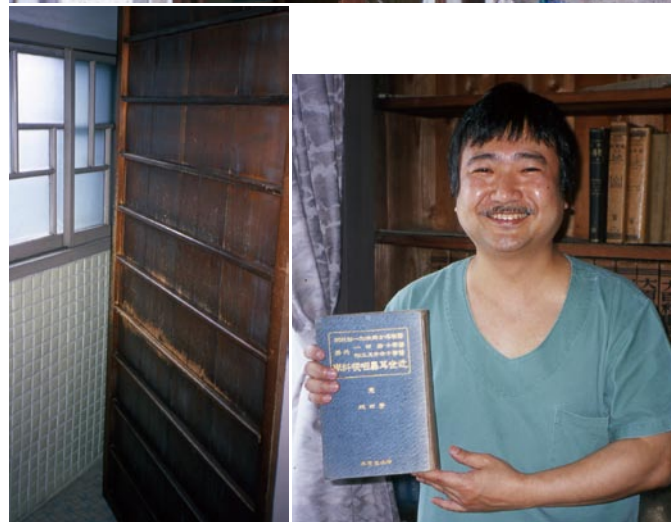
この店では、販売だけでなく修理もやっている。現在、全国で万年筆の修理をしているのはたった五人で、当店のご主人はそのうちの一人だそうだ。全国から万年筆の修理の依頼が絶えないという。直した万年筆の持ち主からの礼状がたくさん届いていた。

中屋万年筆店はこれまでに多くの雑誌で紹介されている。さらに、顧客によって応援サイトも運営されている。このようにお客さんから愛されるのも、ご主人の穏やかな人柄と六十年間、万年筆を修理し続けた確かな技術力の賜物ではないだろうか。

古い医院の中を探検

次は福岡医院という古い医院。中に入ると右手に木の受付台がある。大人の胸ぐらいの高さがあるその台には小さな窓があり、中を見学させていたいただきたい旨を伝えると、快くききいれ、院長自ら案内してくださった。

靴を脱いで中に入ると、町医者らしい親しみのある空気を感じた。書齋に入ると、院長先生はある医学書をみせてくださった。それは院長のお祖父様



が書かれたという明治時代の医学書だった。廊下に出ると丸いものがポコッと三つ並んで出ていた。ちょうど手の平ぐらいの大ききで円形をしている。中心に黒い突起がついていた。話を聞いてみると電灯のスイッチらしいのだ。黒い突起を上下に動かして、ついたり消したりしていたらしい。

院長先生が「この扉を開けるかい？」と悪戯っぽくおっしゃった。扉といっても取っ手もなく、茶色い木の板としか見えない。引き戸のように引いてみても開かなかった。この扉は何本かの横木に板を打ちつけたものだが、よく見ると横木の一部がほかと違う色をしている。その横木をいじってみると、それが右に動き、扉を押し開けることができた。昔はどこにでもあった扉らしいが、私たちの世代に

とっては実に不思議な扉だった。この医院も取り壊して新しく生まれ変わることが決まった。残念だが、その前にこのような出会いがあったことをうれしく思う。

今まで、「文化とは何だろうか」などということは考えたこともなかったが、松江の街を探索しながら「文化」についてあれこれ考えることができた。そこで思ったことは、「街全体が文化のかたまりではないか」ということ。街を歩くと様々なところに「小さな文化」「おもしろ文化」を見つけたことができる。こんなスローな楽しみを、あなたもぜひどうぞ。

(やまの・まなみ／みはら・まゆみ／国文二年生)

やつぱり晴耕雨読が夢だなあ

有馬毅一郎

私は、子どもの頃、すごい山奥で育ちました。出雲市を流れている神戸川の三十キロメートル上流に高津屋川という小さな無名の支流があります。その谷川沿いに六百メートル入った所に私の実家があります。周囲は峡谷で山ばかり、隣家は見えなという一軒家で、今は廃屋同然です。

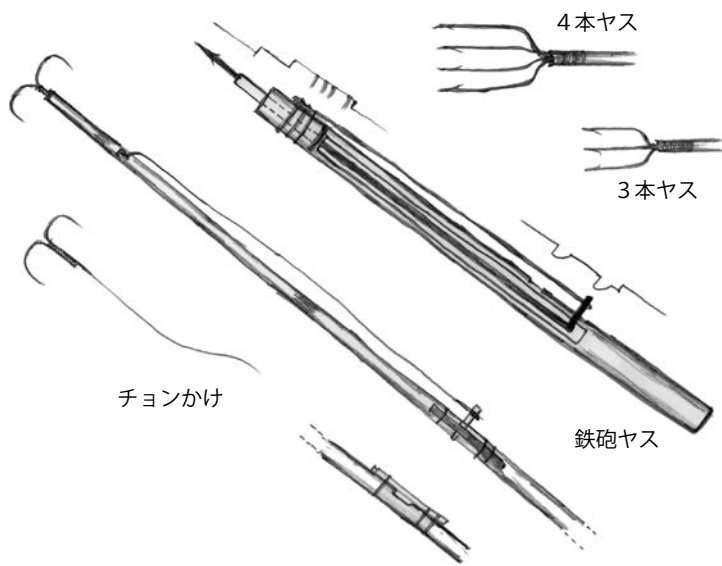
今からみると貧しかったのですが、わずかな田畑、変化に富んだ山の幸の数々が、私の子ども時代を豊かなものにしてくれました。家の前の高津屋川や少し下流の神戸川は、魚取りや魚釣り、泳ぎを楽しむ最高の遊び場で、夏休みは一日も欠かさず、日暮れまでのめり込んでいました。毎日の川は楽しくて、魚との智慧比べで、スリルもあって、飽きることはありませんでした。

小さい川にさえ、アユやウグイ、ウナギが居て、ほとんどの家は牛を飼い、農業にいそしんでいました。大人も子どもも、どっぷりと自然に囲まれて暮らしていた時代があったのです。恐らく何百年何千年と続いてきた自然優位の生活環境がそこで暮らす人間のDNAを型づくっていたのです。

その後急激に、川には魚がほとんど住みつかない時代が来ました。そして、川で遊ぶ子どもの姿も全く見られない時代に入りました。

経済の高度成長は、日本の風景や生活を一変させました。農作物に使用する農薬が川の生き物を犯すということも起きました。学校にプールが完備されると、学校は川での遊びを制限す

るようになりました。進学率の上昇は教室での勉強のみを重視する風潮を生



■子どもの頃作った手づくりの魚取りの道具 (例)

み、子どもの遊びが制約されることにもなりました。道路などの土木工事や川の改修工事が川の様子を変え、人間に川離れを促すことにもなりました。子どもが海や山や川離れを起こし、それらと接触を持たないまま大人になるという現象が見られるようになりました。海や山や川が、どんなに面白い所か、どんなに人間を豊かにしてくれるものかについて、知らない人が多くなりました。

今、子どもが智慧をつけ、立派に成長していく上で、自然との関わりが少なさが大きな障害になることを知っている大人がどれだけいるでしょうか。後年、私は、県内各地を訪ね、隠岐

の島にも何度も渡って、子どもたちの育ち方(例えば遊び)の変化を調べたことがあります。隠岐でも、海や山で遊び育った子どもたちが、数年の内に自然離れを起こし、テレビゲームなどの室内遊びに時間をかけるようにならえていく状況をとらえることができました。

親も、ゲームを与えない時代になり遅れるというあせりを持ったというのも時代の特色と言えるでしょう。



■川との触れ合いを促すコーナーづくり（部分・未完成）

日本は海の国であり、山と川の国なのですが、それと決別して子ども時代を過ごすことが賢明なことなのかどうか、そろそろ結論を出す時期に来ているように思います。

この夏も上野遥さんという私の小学校の同期の友人が田舎にやって来ました。

彼は小学校を終える頃、家族と共に京阪神に移り住み、やがて東芝電気の技術者となり、先年定年退職しました。少し大きさに言えば、田舎から都会に

出て、経済の高度成長と共に日本の工業発展の一翼を担った人間ということになります。退職してゆとりができたために、年二回ぐらい、数日間の予定でやって来るのです。友人の家に泊ったり、私の実家で自炊したりします。

彼はやって来ると実に活動的に動き回って、半世紀前の我が郷里を思い出して、味わっています。山に入り、当時山芋を掘り、栗を拾い、柿を取り、桑の実を食べた頃を確かめます。川で遊び、魚取りをした場所に行きます。今年も救命胴衣まで用意して、川に入って、かつての感触を味わったと言

います。谷川の中を友人と一緒に歩き、数百メートルの間の岩や石の様子を確認し、思い出していました。

学校の通学路も実際に歩いてみえています。主な友人の通学路もです。通学路は、昔とはずいぶん違ってきますが、毎年歩いてみると、思い出出すことが次ぎ次ぎ出て来るし、新たな発見と味わいがあると言います。

彼は、歩きながら、自分を育んでくれた郷里の自然が、少年時代にどんな役割を果たしてくれたのかを検証しているのだと思います。彼が、「自分の生涯」

や「少年時代の自分」を確かめようとする姿には、教えられる。彼は「自分を育ててくれたのは、この田舎の山や川だ」と言っているのです。

私は、学校教育の充実をめざす仕事を一生の仕事にしてみました。一口で言うと、教室の中で次の世代の人たちをどう育てるかがテーマでした。

ところが、教室というところは、元来、本物の自然も実社会もない空箱のような世界ですから、

そこで、計算や文字だけでなく、「人間」まるごと立派に育てることは、とても難題なのです。しかも、教室に来るまでの幼児・児童・生徒・学生さんが、時代とともに自然（実社会）離れを進展させてきていますから、教育は益々困難性を高めてきています。

私は今、自分のからだの中のDNAが騒いでいるのを感じています。一つは「川が呼んでいる」ということを、若い人たちに伝えたいということ。川畔に立って、川に接近したくなるシカケを構想しているところ。手づくりですが、水に親しむコーナーづくりなどを試みています。もう一つ



は、やっぱり自分は、晴耕雨読が夢だなあ、ということ。つまり、晴れた日は外に出て、自然のおつき合いをし、雨の日は家の中でゆったりと読書などを楽しむという生活、自適の生活です。

これまで私たちがぐんぐん来て来た時代に失ったもの、気づわしかなかった生活。だからこそ、ゆったりがいいなと思います。ゆったりには、自然の中がよく似合います。若い世代の人にもすすめ、自分も実行、実現したいと思っています。

（ありま・きいちろう／学長・社会科教育学）